

第2章 三浦の歴史



大椿寺の埴輪（三浦市撮影）

< 拝観の場合は要連絡 >



来福寺の和田義盛像（三浦市撮影）

< 拝観不可 >



空から見た新井城址（京急油壺マリンパーク提供）

1 原始時代

三浦にヒトが住みついたころ=旧石器時代

関東地方では、約2万年くらい前の地層から石を打ち砕いて作った打製石器が見つかっており、三浦半島でもその頃から人々が住みついていただろうと考えられています。この頃はまだ土器が発見されていないため「旧石器時代」と呼ばれています。

三浦市のこの時代の遺跡としては小網代こあじろの水谷戸みずやとや松輪まつわの大畑おおばたけなどがあり、ローム層の赤土の中から黒曜石こくようせきなどの石器が見つかっています。三浦半島の遺跡の特徴は、いずれも当時の海岸から離れた海拔100～150mくらいの見通しのきく台地にあったことです。

狩りや漁りょう中心じょうもんの生活=縄文時代

今から1万年ほど前から、気候が暖かくなるとともに活発だった火山活動もおさまってきました。大陸をおおっていた氷河がとけて海水面が高くなり、日本列島は大陸から切り離されました。

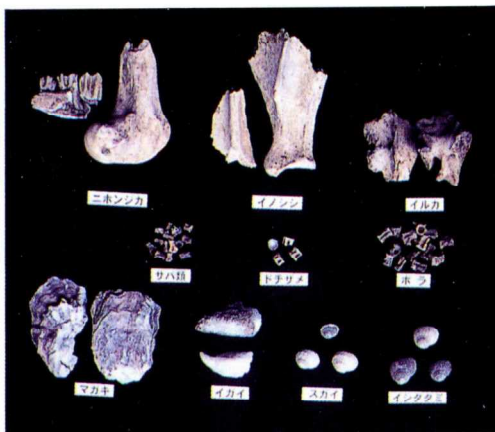
ちょうどこの頃から土器と弓矢が使われるようになり、稲作が始まるまでの約8000年の間、狩りや漁・採集を中心とした生活が営まれていました。使われていた土器に縄目の模様がつけられることが多かったので、この時代を「縄文時代」と呼んでいます。

三浦半島には、当時の入り江や内湾に面して縄文時代の貝塚遺跡が数多くあって研究も進んでいます。横須賀市の夏島貝塚の土器や平坂の人骨は、縄文時代の研究の上で全国的にも大変貴重なものです。

(いずれも戦後に発掘された縄文早期の遺跡で、夏島遺跡は出土物が炭素年代測定で約9000年前と測定された古い土器のあることで、また、夏島遺跡は平坂人骨の見つかったことで有名です。)

三浦市内にも松輪の大浦山・三戸^{みと}・諸磯^{もろいそ}などに多くの遺跡があり、縄文土器をはじめ石器・動物や魚の骨などたくさんの遺物が見つっています。また、諸磯遺跡では竪穴住居も見つかっており、海の貝や魚あるいは陸の小さな獣や木の実などをとって食料とし、1か所に住みつく生活をしてきた縄文時代の人々の暮らしがわかってきています。三浦市内から出土した土器は、「三戸土器」・「諸磯土器」などとして縄文時代年代区分の標準土器とされています。

三浦市内から出土した土器や石器などの遺物は、これ以降の弥生時代や古墳時代のものなどもふくめて初声にある市文化財収蔵庫に収められ、いつでも見学できるようになっています。



諸磯遺跡から出土した動物の骨・魚の骨・貝類

(三浦市所有)



三浦市の原始時代の遺跡

(編集委員作成)

赤坂遺跡に住んだ人々=弥生時代^{やよい}

今から 2400 年くらい前(紀元前 4 世紀ころ)に日本に稲作が伝えられると、人々の生活が大きく変わりました。狩猟・採集の時代から、農業(栽培)を中心とした時代に移っていったのです。貯蔵を主目的とした薄手で硬い弥生土器が使用され、そのほか稲作のための石包丁や青銅器・鉄器などの金属器も使われるようになってきました。この時代を、土器の発見された東京の地名をとって「弥生時代」と呼んでいます。

三浦半島でも、近くに湧き水の出る谷戸のあるところを中心にして 20m 以上の台地で多くの遺跡が発見されており、紀元前後(弥生時代中・後期)から半島各地に弥生文化が広がっていたことが確認されています。

三浦市内では、赤坂(初声)・大浦山(松輪)・遊ヶ崎(城ヶ島)・才京込(諸磯)などの多くの遺跡が発見されています。特に赤坂遺跡からは以前から^{まがたま}勾玉や^{てつおの}鉄斧などが発見されており、1977(昭和 52)年に行われた遺跡全体の約 1/100 にあたる部分の本格的調査では、多数の住居跡が発見されるとともに東日本最大級の住居跡(15m × 12m)も見つかり、全国的にも珍しい大規模遺跡であることが確認されました。これは、この赤坂遺跡が三浦半島の拠点集落であったことを示しているばかりでなく、弥生時代後期のムラからクニへの移行期を考える重要な遺跡として注目を集めています。そして現在、こうした赤坂遺跡を国指定の史跡として保存することが検討されています。

また、大浦山^{どうけつ}洞穴や^{びしゃもん}毘沙門洞穴など、海に突き出た台地の先端にあるたくさんの大小の洞穴の中からも、多くの骨角器や貝製の^{ぎよるうく}漁撈具が発見されています。このことは、この地方では縄文時代に引き続いて漁や採集が生活の中心であったことを示しています。



赤坂遺跡の住居跡

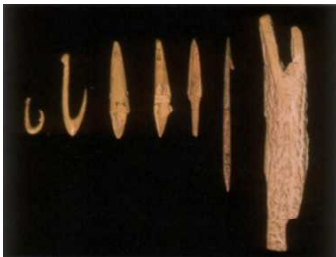
(赤坂遺跡調査団撮影)

さらに、これらの洞穴からは、多くの遺物と共に人骨や占いに使われたト骨も発見されています。このことから、当時の人々が洞穴を生活の場としてだけでなく、占いや埋葬の場として利用していたことがうかがえます。

特にト骨は、『魏志倭人伝』や『古事記』に登場する占いの道具でしたが、1949(昭和 24)年に間口洞穴(松輪)^{まぐち}から日本で初めて発見されました。文字でしかわからなかったことが、三浦半島の地において実物として確認されたことは、歴史的に見てもとても重要な意義があります。



もみ跡が見られる土器
 <三戸原 出土>
 (三浦市所有)



弥生時代の漁撈具
 <大浦山洞穴遺跡出土>
 (三浦市所有)



ト骨ー占いに使用した骨
 <大浦山洞穴遺跡出土>
 (三浦市所有)



弥生時代の漁撈具
 (海外洞穴遺跡出土)
 (三浦市所有)



弥生時代の土器
 (赤坂出土)
 (三浦市所有)

2 古代

古墳が作られたころの時代

3世紀から7世紀にかけて、近畿^{きんき}地方を中心に全国各地に大小多数の古墳が作られるようになりました。農業の発展とともに人々の間に富と力の差があらわれるようになり、その地域を支配した豪族^{ごうぞく}がその富と力の象徴^{しょうちょう}として、豪華な副葬品^{こくそうひん}をそなえた高塚墳を作っていたのがこれに

あたります。

三浦半島でも、少し遅れて5世紀から8世紀にかけて古墳が各地で見つかっています。前方後円墳などの大きなものは少なく、丘の上に作られた比較的小さな円墳が中心で、当時の海岸を見わたす場所に多く作られています。古墳時代の後半になると、山や海岸の崖に横穴を掘って墳墓としものが多く見られるようになります。

三浦市内には図のようにたくさん古墳が分布していますが、その多くは横穴古墳です。それら



三浦市の主な古墳

(齊藤氏作成)

中には、まだきちんと調査のすんでいないものが数多くあります。

向ヶ崎(三崎)の大橋寺裏山の円墳は、城ヶ島大橋の工事の際に古墳の形がこわされてしまいましたが、その工事のときに人物(第2章のとびらのページ)や兜・馬などの埴輪が発見されています。また、菊名の白山神社裏の横穴古墳は家の形をした「切妻造妻入形古墳(きりづまづくりつまいりがたこふん)(雨水を二方向へ流す屋根の形式)」と呼ばれる形式で、内部は棟や柱などが浮き彫りにされて

いたり、一部には朱塗りのあとが見られるものです。

このようにたくさん残る古代の古墳・遺跡・古代の東海道が通っていたこと、『古事記』・『日本書紀』に出てくる日本武尊が三浦半島から房総半島に渡ったという伝説があることなどを考えたとき、当時の三浦半島の人々の生活が中央と結びついていたことがうかがえます。



子持ち勾玉<三浦出土>
(三浦市撮影)



大椿寺裏山古墳出土
の馬型埴輪



白山神社古墳
(三浦市撮影)

<神奈川県立歴史博物館所蔵>
(三浦市撮影)

奈良・平安時代の三浦

「三浦」(御浦)という地名が初めて古い文献に出てくるのは、720年に完成した奈良時代の歴史書『日本書紀』のなかです。692年の項のなかにかのとのひつじのひ
「辛未に、相模国司、赤鳥の雛二隻献れり。言さく、『御浦郡に獲たり』」、
相模国司布勢朝臣色布智等・御浦郡少領と、赤鳥獲たる者鹿嶋臣椽樟とに、位及び祿賜ふ。御浦郡の二年の調役服す。①」とあります。

また同じく奈良時代の正倉院文書には、735年の『相模国封戸租交易帳』として檜前女王の土地「御浦郡氷蛭郷」があげられ、田の大きさや税の額が記されたりしています。この氷蛭郷とは、今の金田の蛭田の地域を指すとされています。いずれも、天皇を中心とした律令体制が三浦半島のすみずみまでいきとどいていたことがよくわかります。

さらに平安時代の『和名類聚抄』という書物には、御浦郡に「田津、御浦(美宇良)、氷蛭(比々留)、三崎(美佐木)、安慰」の5つの地名が示されています(具体的にはどこの地域を指すか不明の点も多い)。

①読み方は岩波書店発行『日本古典文学大系 68 日本書紀下』による。

このように、奈良時代から平安時代にかけての三浦のようすは都にあったいくつかの文書に出てきますが、文書の数も少なく、まだまだ具体的なようすはわかっていないのが実情です。

かいなん 海南神社のいわれ

毎年7月17日から3日間にわたって盛大な祭りが行われている海南神社には、次のような言い伝えがあります。

奈良時代に中央の貴族であった藤原一族の藤原資盈すけみつは、貴族同士の争いに巻き込まれて九州から三崎へ流れつきました。資盈は房州の海賊を退治するとともに、土地の人たちにいろいろなことを教えてくれました。このことに感謝した土地の人たちは、866年(平安時代の初めごろ)に資盈とその妃である盈渡姫みつわたひめをまつり、海南神社を作りました。

また、鎌倉幕府成立の功労者となった三浦大介義明おおすけ よしあきが、海南神社の境内けいだいで「神事狐合(白と赤のきつねを戦わせ、占うこと)」を行って頼朝に味方することを決めたという話もあります。



海南神社

(三浦市撮影)

城ヶ島神宮寺(廃寺)と行基

薬師山(城ヶ島)にあったといわれる神宮寺は、奈良時代に大仏建こんりゅう立に協力した行基によって開かれたと伝えられています。現在は見桃寺にある本尊の薬師如来像やくしにょらいぞうも、行基ぎょうきの作とされています。大仏建立のために全国をめぐる行基は、遠く三浦にも足を運んできたのでしょうか。

また、和田(初声)の天養院てんよういんにある薬師如来像もまた、代表的な平安中期の作と考えられています。

いずれも奈良・平安のころから、三浦の人たちの信仰を集めた仏像なのでしょうし、中央の貴族や僧侶との結びつきのなかに、三浦の人たちの暮らしもあったようです。



見桃寺薬師如来像



天養院薬師如来像

相模のつわもの三浦一族

(三浦市撮影)

平安時代の終わりごろから鎌倉時代にかけて、三浦半島に本拠地を置いていた三浦氏の活躍によって、「三浦」の名が大きく歴史の上に登場してきました。

三浦氏は、平安時代の中ごろに関東地方に住みついた桓武天皇の一族と伝えられています。11世紀の中ごろに東北地方で起きた前九年の役（1051年～1062年）で、源頼義よりよしに従った平太夫たいらの たゆう ためみち為通に三浦郡が与えられたので、為通が「三浦」を家名にしたと言われています。

そのおよそ20年後に起きた後三年の役（1083年～1097年）には、為通の子ためつぐ為継よしいえも源義家はちまん（八幡太郎義家）に従って活躍し、いっそう源氏と三浦一族の結びつきが強まりました。

そのころの関東や東北地方では古代の律令制度がくずれ、有力農民たちは武力を用いて自分たちの土地を守っていました。そして、そのような武力を持った有力農民の頭となったのが源氏や平家でした。その源氏と主従関係を結ぶことで、関東地方の有力武士団の一つとして成長していったのが三浦氏でありました。

鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』あづまかがみには、「のうそ曩祖三浦平太郎為継、八幡殿（源義家）に属して奉り、奥州のたけひら（清原）武衡・いえひら家衡を征してより以後、あくまでそのおんろく恩禄はを啄むところなり」とあります。

三浦為繼ためつぐと鎌倉権五郎景正ごんごろう かげまさのエピソード

『奥州後三年記』より

相模国住人鎌倉権五郎景正という者あり、年わずか 16 歳。大軍の前に命を捨てて戦う間に右の目に矢突き刺されてもなお相手の首を射ぬき、その後、景正は兜をぬぎ仰向けあおむざまに倒れた。

三浦平太郎為繼というものあり。評判の強者つわものなり。これを見て、靴を履くまま景正が顔を踏まえ、矢を抜かんとす。すると景正倒れながら刀を抜き、上着のすそをつかみ突き上げる。

為繼驚きて「これはいかに、何とする。」景正答えて、「弓矢にあたりて死するは強者の望むところ。ところが生きながら土足にて顔を踏みつけらるるは何ごとぞ。お前を仇かたきとして殺し、我もまたここに死なん。という。為繼、舌をまきていうことなし。膝ひざをかがめ、顔を押しさえ矢を抜いてやったという。

三浦の武士

保元・平治ほうげん へいじの乱にも、三浦武士はたくさん都へ動員された。特に、平治の乱に敗れた頼朝の父源義朝は三浦氏を頼りとし、都を逃げる義朝に三浦義澄よしずみが最後まで従っている。また、義朝の長子の悪源太義平あくげん た よしひらの母は三浦義明の娘であり、義澄の兄弟であったという。

源平の戦いのなかでも、三浦武士はあちこちで活躍した。平氏に決定的な打撃を与えた「一の谷の合戦」で、誰もが尻込みしりごみをする鶴越ひよどりえの急坂の上で「三浦では鳥を射るにも、これくらいの坂は馬で歩く。三浦の武士にとっては馬の練習場も同然。」と馬に乗って駆け降りた佐原十郎義連よしつらの話は、三浦武士の勇敢さを示すものとして有名である。

3 鎌倉時代

鎌倉幕府と三浦一族（P25「三浦家略系図」参照）

鎌倉幕府をたてた源頼朝が伊豆で反平氏の旗揚げをしたとき、これに協力して大きな力となったのは、衣笠城（横須賀）にいた三浦大介義明（為継から3代目）とその一族でした。平家の軍勢に衣笠城を攻められて義明は城とともに討ち死にしました（衣笠城の合戦）が、義明の子義澄や孫の和田義盛が伊豆で敗れた頼朝と房総で合流して関東地方の源氏勢力を結集させ、1192年の鎌倉幕府成立へと結びつけたのです。

幕府成立に重要な役割を果たした三浦一族を頼朝は重視し、和田義盛を幕府の重要機関である侍所の別当（長官）につけるとともに、義澄を三浦の別当と呼んで幕府の元老に位置づけました。

義澄の領地である三崎には、頼朝の別荘である椿の御所・桜の御所・桃の御所が作られました。また、頼朝が多くの子供とともに歌や踊りを楽しんだということから、歌舞島（三崎二町谷）の地名が今でも残っています。

しかし、頼朝の死後、三浦氏は北条氏と対立を深めました。そして、和田義盛が三浦氏の勢力を固めて北条氏を倒そうと立ち上がりましたが、義澄の子の義村が北条方へ寝返ったこともあって鎌倉の由比が浜での戦い（1213年和田の乱）で敗れました。また、義村の一族も、三代将軍実朝の暗殺事件や承久の乱を通して一族の内紛や北条氏との対立がおこり、義村の子の泰村・光村のときに北条氏に攻め滅ぼされてしまいました（1247年宝治の乱）。こうした動きのなかで三浦氏は幕府中央から排除され、執権北条氏が幕府を動かすようになりました。

三浦市には、上宮田にある来福寺の和田義盛木像（市指定文化財）をはじめ、初声の和田を中心とした義盛の旧跡や金田湾を見下ろす丘の上にある義村の墓と伝えられる石碑など三浦氏に関わる史跡が数多く残っており、三浦市と三浦一族の関係の深さを物語っています。



来福寺<和田義盛の木像が祀られている>

(三浦市撮影)



歌舞島から見る富士

(三浦市撮影)



三浦義村の墓

<金田・岩浦>

(三浦市撮影)



和田義盛精進の地(わくり井戸)

<初声・高円坊>

(三浦市撮影)



三浦市にかかわる主な史跡

(編集委員作成)

三浦氏にかかわる主な史跡

4 室町・戦国時代

三浦道寸と新井城

1333年、後醍醐天皇の呼びかけに応えた新田義貞や足利尊氏に執権北条氏が倒されて鎌倉幕府が滅び、時代は室町・南北朝時代へと移りました。このようななかで、三浦氏もいろいろな中央勢力と結びつきながら、相模国の守護職と所領を確保してきました。新井城が小網代・油壺に築かれたのはこの頃だといわれています。

室町時代後期、新井城主である三浦時高(義明より11代目)には子どもがなく、関東管領上杉氏と小田原城主である大森氏の娘との間に生まれた義同を養子に迎えました。ところがその後時高に実子が生まれたため、義同は母の実家の小田原に戻って出家して道寸と名乗るようになりました。

しかし、「三浦氏を継ぐのは道寸である」とする道寸の家来が多く、道寸も意を固め、1494年に義父の時高を新井城に攻めて時高父子を自殺させてしまいました。こうして道寸は新井城の城主となり、三浦氏を継ぐことになりました。応仁の乱を経て戦国時代に突入していた頃のことです。

この頃・伊豆国から相模国にかけて力を伸ばしてきていたのが北条早雲です。早雲は小田原の大森氏を倒し、相模国さらには南関東全体に勢力を伸ばそうとしてきました。これに対して道寸は新井城を子の荒次



北条早雲と三浦道寸の城

(編集委員作成)



圓照寺 三浦道寸の写本
(古今和歌集)

(編集委員撮影)

郎^{よしもと}義意にまかせ、相模国中央の岡崎城（伊勢原市）で早雲を防ごうとしました。しかし、早雲は岡崎城を破ったうえ三浦半島の入り口の住吉城^{すみよし}（逗子市）をも^{おとし}陥れました。道寸は最後のとりでとして、自然の地形に恵まれた新井城にたよらなければならなくなりました。

新井城は、東西から深く谷の切れ込んだ引橋を大手（城の正面）とし、その南側全体を1つの城と構想した大規模な中世の城で、その中心は小網代の半島の先（現在の東大臨海研究所となっているあたり）と考えられています。三方を海に囲まれた崖の上であり、遠くは大磯や小田原まで見渡せ、物資の補給も容易な新井城。しかも、城内の千駄^{せんた}やぐらには2000俵もの米が貯えてあったといわれています。「ここにたてこもれば…」と、道寸父子は考えたのでしょう。

一方、早雲の軍は引橋の手前にあたる菊名の陣場原^{じんばがはら}に陣どり、持久戦となりました。道寸の期待した援軍は、早雲の軍に打ち破られて三浦まで到着できません。3年間の籠城^{ろうじょう}で、兵糧^{ひょうろう}も尽き果てました。ついに道寸父子は、ここを最後の戦いと覚悟を決め、激しい戦いのなかで75人の味方と共に自決^{じけつ}した（1516年、一説には1518年ともいう）と伝えられています。

油壺^{あぶらつぼ}の名は、この戦いで湾一面が血潮^{ちしお}で染まり、まるで油を流したかのような状態になったことから名付けられているといわれています。



現在の引橋（編集委員撮影）



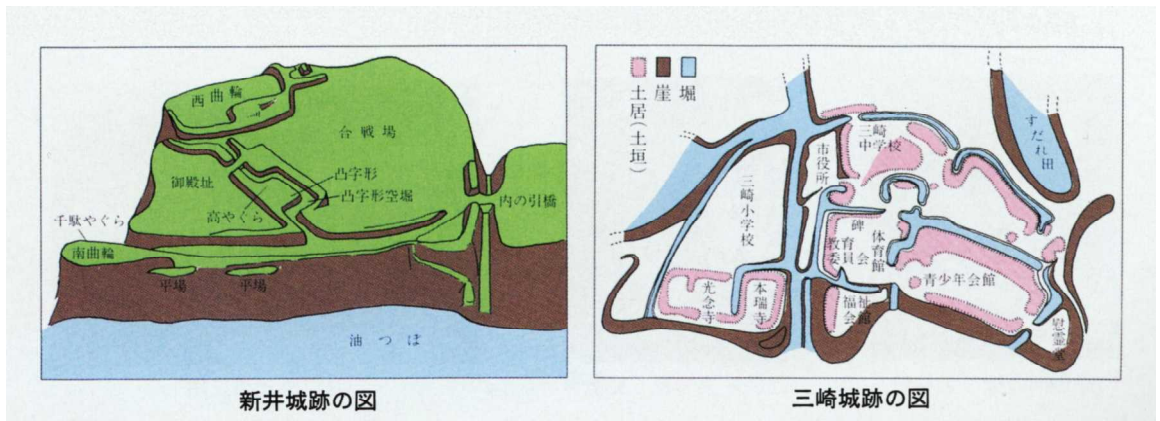
新井城内より出土した拵の一部
<東大臨海実験所蔵>

（三浦市撮影）

道寸の一部の家臣は、その後もしばらく城ヶ島（将ヶ島）に立てこもって抵抗しましたが、後に北条水軍として組織されました。安房里見氏^{あわさとみ}の三浦半島攻撃に対して、三浦を守った三崎十人衆はこの人たちです。三崎城

(三崎中のまわりに土塁の一部が残っている)の時代が始まったのは、この頃だと言われています。北条湾の名が残ったのも、こうしたいわれからなのでしょう。また、上宮田には、土地の豪族の松原新左衛門^{しんざえもん}が浜で火をたいて、里見軍と戦う北条氏綱^{うじつな}(早雲の子)を嵐の海上から救ったという話も残っています。

三浦氏を破った北条氏は、相模国をまとめる戦国大名となります。そして、駿河の今川氏や甲斐^{かい}の武田氏などと相争うとともに、検地などを通して一段進んだ領国支配^{りょうごくしはい}を完成させていくのです。



(編集委員作成)

荒次郎の首

新井城の落ちるとき、荒次郎は自ら首をかきおとした。その首は、早雲の城のある小田原に飛んで海岸の松の木にかかり、生首のまま3年もあった。いかなる名僧^{くよう}に供養を頼むも死なず。あるとき道寸が出家した総世寺の中室和尚が、「現つとも夢ともしらぬひとねむり 浮世のひまを曙^{あけぼの}の空」と一首詠^よむと、たちまち白骨となったという……。この伝説は、小網代の海蔵寺の絵馬^{えま}に描かれたものですが、このほかにも新井城落城の話は江戸時代の講談などによく登場したようです。

5 江戸時代

海上交通の発達と三崎

1590年に相模国の北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされると、関東全域が秀吉によって徳川家康の領地とされ、三浦半島も徳川氏の支配するところとなり、三浦の水軍も徳川氏に引き継がれました。

さらに1603年、家康が江戸幕府を開いたことから江戸が全国の中心地となると、江戸湾入り口の重要地点にあたる三崎は幕府が直接治める天領となり、幕府の旗本向井正綱やその子の忠勝などが船奉行として海上を行き来する船を監視するようになりました。

今でも見桃寺(三崎)には、正綱はじめ向井一族の立派な墓が残っています。

江戸幕府が安定期を迎えると三崎は、軍事上ばかりでなく商業・交通の面でも重要性を増してきました。三崎に奉行所や代官所が置かれ、海の関所として「廻船」(沿岸行路の運送船)の荷物改めとともに、「船泊り」(船の風待ちや潮待ちをする)や廻船問屋を通して物資の移出入も多く行われるようになってきたのです。この時代の三崎は、浦賀とともに三浦半島で最も栄えた“町”として発展していったのです。

海上交通の増加にあわせて航路の安全もはかられました。安房ヶ崎(城ヶ島)には物見やぐらとして「のろしだい」が作られ、種々の合図に使われました。



向井正綱の像<見桃寺>

(拝観の場合は要連絡 三浦市撮影)



向井一族の墓<見桃寺>

(三浦市撮影)

1678年には幕府によって今の灯台のある西山(城ヶ島)に、魚油を用いた
行燈式あんどんの「灯明台とうみょうだい」が建てられました。しかし、余り明るくないという
ことで、1720年に松薪まつまきをたく「かがり屋」となって1870(明治3)年まで続
き、現在の洋式灯台へとつながったのです。

※かがり屋…篝屋守護の詰め所。そこに詰めた武士。のちに鎌倉にも設置された。夜
間辻々でかかり火をたいたからいう。

漁業の発達

三方を海で囲まれた三浦では、昔からボウチョウ(見突き)などの原始的
な漁業が行われ、近隣の人たちに海の幸を供給してきました。

江戸時代に入ると全国的な商品経済の発展のなかで、三浦でも江戸や大
阪の大消費地に対して大量に獲とって大量に売るという形の漁業が発展して
きました。紀伊(和歌山県)地方から移住してきた漁民によって行われた上
宮田周辺での「マカセ網」は、このような漁業てんけいの典型です。

江戸時代以前より関西地方の漁民は、上方かみがた(京都や大阪)で大量に売れる
「干鰯ほしか」(綿花栽培の肥料としてその頃から使用される)の原料となるイワ
シの漁場を求めて、関東地方まで進出してきました。そして、江戸時代の中
ごろ、紀伊の下津浦しもつうらの漁師たちも三浦半島下浦地方に移住し、「マカセ
網」という大型の網でイワシを獲るようになったのです。

この漁法は魚群の来るのをじっと待つのではなく、何艘そうもの船でイワシ
を取り巻いて獲まさあみる巻網で水揚げも多く、三浦の漁師にも大きな影響を与え
たと考えられています。獲れたイワシは
「干鰯」として上方へたくさん送られました。

今でも上宮田のいくつかのお寺には、当
時の移住民である「マカセ」の人たちの
墓があり、「マカセ井戸」と呼ばれる井



十劫寺のマカセの墓(編集委員撮影)

戸も残っています。

また、この時代、江戸でも武士のための魚(肴^{さかな})を出す場であった「肴場」が城下の庶民のものとして

して発達しました。江戸の魚問屋や地元の有力な魚商が村で魚を買い(「生簀^{いけす}上げ」-なかには沖まで出て漁師の魚を直接買う「出^で買^がい船」などもあった)、江戸の市場に並べたのです。このような流通機構の整備がさらに漁業生産を拡大し、魚種を増やしたり新しい漁法の開発を進めました。また、鮮魚^{せんぎょ}を江戸まで届ける高速船の「おしょくり船」(押送船)もさかんに利用されました。

このようにして、三浦の鮪^{まぐろ}・鰹^{かつお}・鯛^{たい}・スバシリ(ぼら)・イナダ^{あわび}・鮑^{あわび}・サザエ^{えび}・海老^{たこ}・蛸などは江戸時代から有名になり、江戸の発展とともに三浦は漁業の村として発展していくのです。

新田の開発と農業

江戸時代に入ると農業も発達してきました。その1つとして、三浦半島各地でも新田の開発が進みました。

初声の「入江新田」は、1708年に武山村太田^{おたわ}和の山田惣左衛門^{そうざえもん}が開発を始めて、その子の儀左衛門^{ぎざえもん}がこれを引き継ぎ、30年もの年月で完成させたものです。詳しい開発の記録は残っていませんが現在の初声小学校のまわりの田がそれで、延長400mの石で根固めした外側^{とて}土堤と約250mの内側土堤、さらに精進川^{しやうじん}沿いを2本の土手で仕切^{しき}ってその内側を田にしたもので、広さは15町歩・石高は22石であったとされています。規模は大きなものではありませんが、完成までにかかった長い年月にその苦労がしのばれます。そのほか「上宮田新田」や「松輪新田」をはじめとして、多くの村で新田の開発が進められたのもこの頃です。

また、新しい農機具の使用や、干鰯^{しもごえ}・下肥^{もぐさ}・藻草^{かいそう}（海藻）などの「金肥^{きんぴ}」

（買って来た肥料）の使用もさかんになり、農業生産も高まってきました。

一方、商品作物としての特産物の生産もさかんになり、三浦大根のもとになる「高円坊大根」や「三浦木綿^{もめん}」は三浦の特産物として世間に知られるようになりました。



入江新田の位置

（編集委員作成）

このように江戸時代は、新田開発と商品経済が全国的に進み、そのなかで三浦の農業も大きな発展をしていきました。

外国船の渡来と江戸湾防備

徳川三代将軍家光は、1635年に「鎖国令^{さこく}」を出して中国とオランダ船以外の来航を禁じて外国との貿易を制限し、貿易港は長崎だけとしました。

しかし、19世紀に入ると、ロシア・イギリス・アメリカなどの船がたびたび日本各地に来て、国交を強く望むようになりました。これに対して幕府は、外国船の来航に備えて1810年に、白河藩^{しろかわ}と会津藩^{あいづ}に江戸湾入り口の砲台建設を命じました。1811年に会津藩は三浦半島の一部に領地を与えられてその任につきました。そして、走水^{はしりみず}・浦賀・城ヶ島に大砲台場＝「御台場^{おだいば}」を築き、城ヶ島には遠見番所を、城山（三崎）や鴨居^{かもい}（横須賀）には領域支配のための陣屋を作って江戸湾警備にあたりました。

『城ヶ島の過去帳』によると、「文化9（1812）年10月18日より安房ヶ崎（城ヶ島）御台場に発火演習^{はつかえんしゅう}始まる。海防^{かいぼう}にあたる船舶は沿海村名主。水夫は漁夫。その日給二百文。4隻の船の水夫計104人。名主および船主には若干^{じゃっかん}の年俸^{ねんぼう}を給し、帯刀^{たいとう}を許す」とあり、当時の海防のようすがうかがえます。また、向ヶ崎の大椿寺などには、三崎の地で亡くなった会津藩士やその家族の墓が今も多数残っています。

その後、三浦半島の海防はいくつかの藩に交代でまかされましたが、外国船の来航はやまず、三浦沖にもイギリス船やアメリカ船が多数来ています。そしてそのたびに、海防をまかされた大名は大きな出費を強いられ、近くの村々では人足や船・馬などを提供させられ、大変な負担になっていたようです。



会津藩士の墓(城山)

(三浦市撮影)

このような状況のなかで、幕府は 1825 年に「外国船打払令^{うちはらいれい}」を出しました。1847 年には、上宮田(現在南下浦市民センター)に海防陣屋本営と栄町(旧保健所跡地)に分営が作られ、彦根藩や長州藩などがその任務につきました。明治維新の改革に力をつくした木戸孝允^{きどたかよし}や伊藤博文^{いとうひろふみ}(長州藩)なども、青年時代にこの海防陣屋に衛士^{えじ}として勤めていた記録が残っています。

1853 年 6 月 3 日(現 7 月 8 日)、4 隻の黒い艦隊^{かんたい}が三崎沖を通過して浦賀沖に現れました。沖で漁をしていた漁師が驚いて裸のまま浦賀奉行所^{ぶぎょうしょ}に駆け込み、この急を知らせたと伝えられています。この 2 隻の蒸気船^{じょうきせん}をふくむ 4 隻の黒船こそ、260 年の鎖国を開こうとアメリカ大統領の国書をたずさえてきたペリーの艦隊でした。6 月 9 日(現 7 月 14 日)にペリーは久里浜に上陸し、江戸幕府にアメリカ大統領の国書を渡しました。幕府は将軍が病気であることを理由に来年の回答を約束し、会談は 30 分たらずで終わりました。

翌 1854(安政元)年にペリーは再び来日し、神奈川(横浜)で「日米和親条約^{にちべいわしん}」が結ばれて日本は開国することになりました。

このように、私たちの住む三浦半島は日本の開国の中心の舞台となったのです。

庶民文化の発展

江戸時代の産業の発達にともなって三崎を中心とする“町”が発達し、庶民文化も生まれてきました。

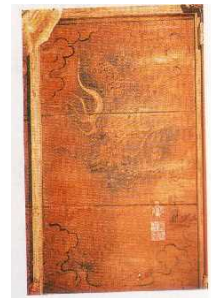
江戸時代の中ごろには、江戸と三崎^{きんごう}近郷の俳人たちとの交流があり、そのためのガイドブックとして、三崎の地誌をまとめた『三崎志』^{おうきゅう}が鶯丘^{おうきゅう}舎草也^{しゃそうや}（本名木村伝右衛門^{でんえもん}）によって書かれています。江戸時代の画家であり俳人でもある英一^{はなぶさいちちよう}蝶^{いっぼう}（一峰^{りゅう}）の「竜の天井絵」^{てんじょうえ}が光念寺^{こうねんじ}にあるのも、このような交流関係からでしょう。また、海南神社にある江戸の魚問屋から寄進された天井絵も、当時の江戸の絵師の手によるものです。



海南神社天井絵
(三浦市撮影)



大椿寺杉戸絵
(三浦市撮影)



光念寺天井絵
(三浦市撮影)

< 拝観の場合は要連絡 >



錦島三太夫の墓
(三浦市撮影)



三浦市の各地に残る庚申塔
(三浦市撮影)

現在も続いている若宮神社(初声)の「宮田の相撲」も江戸時代に始まっており、近郷の力自慢が集まってにぎわっていました。半次(下宮田)のバス停そばには、力士から興行元となって当時活躍した錦島三太夫の墓が残っています。三浦市各地に残っている庚申塔も、江戸時代に建てられたものが多くあります。今でも「話は庚申の晩に……」という言い方にあるようにその風習が一部に残っていますが、当時の人たちは庚申講を作って村全体の相談やレクリエーションの場とし、村の願いとして庚申塔を建てていました。このほかにも江戸時代には、今も三浦市で広く行われている稲荷講(イナリッコ)をはじめ、村のまとまりを中心としたいろいろな講がさかんでした。

三崎小学校の南にある通称「上の御堂」の下に、「龍潜庵」という不動堂があります。その境内には2つの筆塚が建っています。江戸時代のもので、市内で最も古いといわれているものです。市内にはこのほかにもいくつかの筆塚がありますが、これは江戸時代に庶民の子どもを教育した寺子屋で、筆子(生徒)たちが師匠(先生)の死を惜しんで建てたものでしょう。

また、会津藩は海防の役人を養成するために、三崎に集義館という学問所を置いたことも記録に残っています。

※いなりっこは、農村の豊作祈願をする信仰の一つで稲荷講がなまった呼び名とされ、三崎の海南神社に納されている「面神楽」の影響を受けて、子ども達が面をつけての踊りや茶番劇を披露するようになったものです。

平成14年4月1日、三浦市無形民俗文化財の指定を受け、現在、三浦いなりっこ保存会により三崎の伝統芸能として保存継承されています。



いなりっこ<海南神社>

(編集委員撮影)



筆塚<海南神社>

(三浦市撮影)

6 明治から現代へ

明治のあけぼの

1867(慶応3)年の大政奉還^{たいせいほうかん}・王政復古^{おうせいふっこ}によって、260年あまりにおよぶ江戸幕府の政治が終わりをつげました。翌1868年、元号が明治と改められ、明治政府は欧米の文化を取り入れながら国の近代化政策を始めました。

三浦にも、少しずつ新しい文化が入ってきました。1870(明治3)年には日本で4番目の白色レンガづくりの洋式灯台である城ヶ島灯台が、さらにその翌年には^{つるざさき}剣崎灯台が作られ、これまでの^{うすぐら}薄暗いかがり火に変わって、ガラスのレンズを通して灯油を燃やした白色の光が海を照らしました。1871(明治4)年には郵便取扱所(郵便局の前身)が松輪村に、1873年には海南村に開設され、これまでの^{ひきやくふ}飛脚夫や近くの農家の人が配達人として^{やと}雇われました。彼らの制服は国が定めたもので、これが三浦で初めて見られた洋服だったと思われます。

1871(明治4)年、政府は「^{ごう}郷学校の設置に関する^{おふれがき}御触書」を出しました。翌1872年には、三浦で最初の学校である三崎郷学校が日の出町に開校しました。また、この年に発布された「学制」によって、1873(明治6)年に三浦に東^{ひがし}岬^{しみさき}学舎(三崎郷学校を改称)・西^{にし}岬^{しみさき}学舎・城ヶ島学舎(学舎とは



(三崎小学校所有)

今の学校のこと)など 14 もの学校が開かれました。いずれも個人の家や寺を校舎として使っていました。

1877(明治 10)年に横須賀警察署三崎分署が長井から六合^{むつあい}①の円照寺^{えんしょうじ}の境内^{けいだい}(現在の三崎 4 丁目)へ移りました。巡査は 2 名で、彼らの制服は郵便配達夫^{ついで}に次いで^{めずら}珍しい洋服姿でした。最初この警察署は現在の三崎公園のところに作られる予定でしたが、地元の人々の強い反対運動が起こり、隣村である六合につくられました。1883 年には海南町に、三崎では初めてのガラス窓を使った 2 階建庁舎が新築されました。

こうして明治になって新しい制度や仕組みが入って来たとはいえ、人々の暮らしは昔とさほど変わらずに営まれていました。それぞれの家庭で、行燈^{あんどん}からランプに変わったのは明治 20 年頃からでした。また、しばしばコレラが流行し、1886(明治 19)年には 120 名の患者のうち亡くなった方が 40 名もいました。そのため人々はコレラ予防のために、“三度の食事を蚊帳のなかでとった”とか、“梅干しを食べた”とか、“海南神社の世話人が秩父^{ちちぶ}の三峰神社^{みつみね}の御本尊をつれてきた”という当時の様子が現在でも伝えられています。

明治の小学校のしくみと校則

当時の小学校は下等小学と上等小学に分けられており、6 歳から 9 歳までは下等小学へ、10 歳から 13 歳までは上等小学へそれぞれ 4 年間通います。下等小学も上等小学もそれぞれ 8 級から 1 級までの段階があり半年ごとに上の級に進級するために進級試験に合格しなければなりません。また、毎月小試験も行われ、その成績が悪くても進級できませんでした。試験の結果は教室に張り出されて公表され、試験の結果が良ければ褒美^{ほうび}(賞状と賞金)がもらえました。

当時の授業は朝 8 時から 6 時までで、内容は算術(算数)・綴り字・仮名づかい・習字・修身^{しゅうしん}(道徳)・行儀作法などで、かつての寺子屋時代のなごりがありました。

また校則としては、

○ 授業中に勝手に席を離れ・雑談したり、ものを食べたり、煙草^{たばこ}をの

んではいけない。

- 校内では、水や墨^{すみ}を飛ばしたり、紙くずを散らかしたり、落書きをしてはいけない。
- 生徒の男女の別は、授業から食事にいたるまで同席はもちろんのこと、すべて校内で言葉をかわしてはいけない。
- 校則を破ったり、怠けたり、口論・けんかした者は正座1時間、再び破れば3時間、3度破れば翌日午前7時まで。それでも改まらなかったら処分する。

など大変^{きび}厳しいものでした。

しかし、当時はまだ義務教育ではなく、授業料(明治15年ごろで月6銭ほど)もかかったので、途中でやめたり、家事の仕事の手伝いのため学校へ通えない子どもも多く、就^{しゅうがくりつ}学率は低いものでした。特に女子の入学者は少なく、1880(明治13)年小網代村では学^{がくれい}齡児童76人に対して就学者は男子18人で女子はわずかに2人の計20人に過ぎませんでした。まだまだ漁師や農民・女には学問はいらぬと言われた時代だったので

す。

①六合(村) 当時の六合村は現在の原町・栄町・城山町・宮川町・晴海町・岬陽町・白石町・海外町・東岡町・向ヶ崎町・諏訪町・天神町と三崎町六合・三崎1丁目・三崎4丁目の一部を含む地域です。

明治初めごろの産業

明治になったとはいえ、農業も漁業もその経営や作業内容は江戸時代と変わらないものでした。当時の農作物は、麦・甘薯(さつまいも)・粟・陸稲・大豆などが自家用として作られていました。そうしたなかでも、宮川のナス・小網代のネギ・高円坊のダイコンなどは名前が少しは知られた作物でした。漁業では、大きな船でも長さ3間半(約6.4m)・幅6寸(約1.9m)で、この船で東は千葉の布良の沖合、西は伊豆半島から尺5御蔵島まで漁に出ていました。そこで鮪・カジキ・鰹・鯖などを捕っていました。いっぽう、小さな船では、沿岸でサザエ・鮑・海老・蛸などを捕っていました。こうしてとれた鮮魚や野菜などは、押送り船で京浜地区に運ばれて売られました。

1877(明治10)年に開かれた第1回内国勸業博覧会(東京上野公園)への三浦からの出品目録を見ると、当時の三浦の特産物を知ることができます。

博覧会に出された三浦市の出品物

菊名村	海參(きんこ、干しなまこ)
上宮田村	メリヤス1組、はだか麦1升、火酒浸白えんどう、漁具絵図、漁具図
金田村	砂鉄、ふねくぎ大5本、ざる大小3
松輪村	黒菜1束、海苔1帖
毘沙門村	磨き砂3合、わかめ1束
三崎町	鮫油1升、海竹(のち海柳木に変更)、払子貝、イカ角2、魚突具3、かつおぶし3本、鮫びれ1組
六合村	ナス
城ヶ島村	心天草、ひじき各1袋、あわび3、さんご交砂3合、もぐり網、干しアワビ
小網代村	黒砂糖1斤(600g)
諸磯村	磯カネ1、干しトコブシ
下宮田村	刀鎌1、ワカメ切り鎌1、心天草かき
三戸村	えんどう1升、鶏冠草1袋
和田村	なたね1升、ごま種1升
高円坊村	ダイコン(木彫り)2本、ダイコン種子3合
林村	海塩1升(入江新田の海岸塩田より産出)

(編集委員作成)

おしょくり船(押し船)

押し船は、波を切るように舳先が細くできている船で、脚の速い船。7～8挺の櫓によって漕ぐ船で、江戸時代以来使われていますが、明治時代には「生舟」と「活け物舟」の2つがあり、「生舟」にはマグロなどの鮮魚を、「活け物舟」には塩干魚やエビ貝類を積みました。キハダマグロなら50本(約2000kg)くらい積みました。「生舟」の出発は夕方・「活け物舟」は午前10時頃で、いずれも翌朝の暗いうちに東京の魚河岸に着きました。帰りの船には三崎の消費物資を積んできました。この船の乗組員は力自慢の若者が多く、明治20年ごろで東京への1往復の賃金が2円でした。当時2円あれば1か月生活できた時代です。しかし、これも明治40(1907)年頃には汽船や発動汽船の登場とともにその姿を消していきました。

三浦市の前身

1889(明治22)年に町村制が施行されると、これまで小さく分かれていた町や村を合わせて、三崎町(三崎町・六合村・城ヶ島村・小網代村・諸磯村)、南下浦村(菊名村・上宮田村・金田村・松輪村・毘沙門村)、初声村(下宮田村、三戸村・和田村・入江新田・高円坊村)の3つの町村にまとめられました。町村長の選挙も行われ、それぞれの役場を設けて政治にあたるようになりました。

交通・通信機関の発達

三浦の産業は、明治に入ってもさほど発達しませんでした。その大きな理由として、交通機関が依然として「おしよくり船」であり、それを利用できない人は馬車も通れぬ道を歩いたり、馬の背に荷物をのせたりして運ぶしかなかったことがあげられます。1881(明治 14)年に初めて三崎港に汽船きせんが入り、東京と三崎が直接結ばれてスピードアップがはかれると、だんだん人と物の交流がさかんになってきました。また、1901(明治 34)年に乗り合い馬車が三崎～浦賀の間に開通し、1909(明治 42)年には三崎～長井～横須賀を乗り継ぎで連絡する馬車が開通しました。

乗り物の値段あれこれ(明治の後半)

- ・ 汽船の運賃 東京～三崎 所要時間約 5 時間
東京発 AM 8:00 三崎着 PM 1:00
三崎発 PM10:00 東京着 AM 3:00
通行税とともに 1 等 42 銭 2 等 21 銭
- ・ 乗り合い馬車 浦賀～三崎 馬は 1 頭立てで定員は左右 3 人ずつ
1 日 4 往復 所要時間 約 3 時間
乗車賃 42 銭(雨天時は 2 割増し)
- ・ 人力車 浦賀～三崎 1 円 10 銭
- ・ 鉄道運賃 横須賀～東京 39 銭
- ・ 人夫の日給 50 銭

馬車や人力車があっても人々はほとんど歩いて行動していました。また、当時の東京と三崎を結ぶ汽船は魚を運ぶためのもので、乗客にとっては狭い客室せまの蒸し暑さむ あつと魚さかなの臭いにおでなかなか大変な船旅だったといえます。

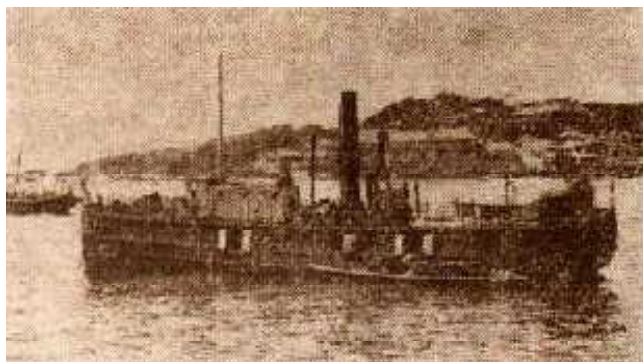
1888(明治 21)年に劔崎電信局で電話が開通し、さらに 1911(明治 44)年には三崎に初めて電話が開通(加入者が 13 名でスタート)するなど、通信機関についてもいよいよ近代的なしくみができあがってきました。

1910(明治 43)年には三崎町と長井村を送電区域にする三浦電気株式会社が、翌年には三崎製氷株式会社が設立され、魚市場の発展の基礎ができました。

こうして明治の終わり頃になって他都市との結びつきが強まると、三浦の産業も市場を獲得してだんだんと発展してきました。特に漁業面では、汽船による東京への魚の輸送のときには氷を使うようになったため、“三崎”の名が東京では新鮮な魚の代名詞となり、三崎の魚は魚河岸では高値で仕切られるようになりました。

南下浦や初声では、葉タバコの栽培や高円坊ダイコンをはじめとする蔬菜栽培がさかんとなり、南下浦ではミカンの栽培も始まりました。また、獲れた魚も魚商が発動機船で市場へ運び、野菜も汽船を使って東京へ出荷されるようになりました。

それとともに、都会から汽船に乗って多くの避暑客が汐湯治(海水浴のこと)に訪れ、明治の後半から大正にかけて、風光明媚な三浦の地にいろいろな文人も訪れてきました。



三崎－東京を結んだ三盛丸
(高梨健児氏所有)

三浦を訪れた文人たち

北原白秋 言葉の音楽師といわれ、美しい言葉を使って新しい感覚に満ちた詩を数多く作りました。

三崎にゆかりのある「城ヶ島の雨」は、その代表的なものの1つです。白秋は、1913(大正2)年に家族とともに向ヶ崎(三崎)に移ってきました。当時の作品には、「引橋の茶屋のほつりをいそぐ時 ほとほと秋は過ぎぬと思ひき」とあります。引橋周辺の風景に強くひかれていた白秋の姿をしのぶことができます。また、三崎小学校の校歌などにその足跡をみることができます。

斎藤茂吉 アララギ派^①の中心となって、多くの歌人を育てた人として知られています。1914(大正3)年、歌人茂吉が妻とともに乗り合い馬車にガタガタゆられながら、長井から引橋に向かっていったときの沿道の風景を表した作品に「まるくふくれし煙草ばたけの向ふ道 馬車は小さく隠ろひにけり」「ほくほくとけふも三崎へのぼり馬 粟畑こえていななきにけり」とあります。七曲りの坂を経て、引橋に向かうあたりには、煙草や粟畑が広がっていました。

その他の文人 引橋にひかれて作品『森の二時間』を書いた折口信夫・小説『桜の御所』を書いた村井玄斎・彫刻家の北村四海・美術評論家の岩村透・歌人の若山牧水・俳人の松本たかしなどが三崎を訪れています。

① **アララギ派** 1908(明治41)年に出された短歌雑誌『アララギ』を中心に活躍した大正・昭和の歌人のグループ。

大正時代の三浦

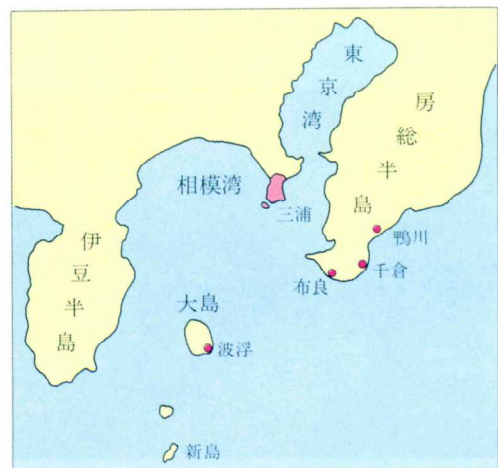
明治の終わりから大正の初期にかけて三崎の沿岸漁業は黄金期であり、また1つの転換期でもありました。この頃は、秋サバやイカの豊漁が続きました。また、これまで大型漁船に限られていたエンジンが沿岸漁船にも付けられはじめると、これを機に一本釣りの手漕ぎ船の動力化が進みました。こうなると漁場は拡大し、1月以降は大島波浮口(ムツ・メダイ)、3～4月房総南端の布良瀬(ムツ・キンメ・メダイ)、5月鴨川～千倉沖(サバ)、6～7月大島(サバ)、7～8月新島(サバ)、9～10月大島(サバ)、10～12月相模湾(マグロ)というように、1年を通じて出漁するようになりました。一方1921(大正10)年には三崎町営魚市場が海南町に建設され、翌年には魚市場の水揚げが300万円を突破するほどの盛況ぶりでした。こうして三崎の漁業は、沿岸漁業を主力として発展してきましたが、遠洋漁業はあまり見られませんでした。

農業も大正年間にダイコンの栽培がいっそう広まり、「三浦ダイコン」の名前がつけられたり、初声ではトマト栽培や鉄砲ユリの球根作りが導入されたり、初声や南下浦ではキュウリの栽培など都市向けの農業が少しずつ発展してきました。



仲崎の露天魚市場

(松崎貞夫氏所有)



相模房総海域図

(編集委員作成)

交通機関も馬車に代わって 1917(大正 6)年に乗り合い自動車(三崎～横須賀・3円 50 銭・丁型フォード)が登場したり、1919(大正 8)年にはダイコンや魚の輸送に初めてトラックが用いられるなど、これまでの汽船に代わってだんだんと自動車輸送が行われるようになってきました。また 1913(大正 2)年には、三崎町に初めて電灯がつけました。こうして、産業や経済の面でも明るいきざしが見えてきました。

関東大震災

1923(大正 12)年 9 月 1 日午前 11 時 58 分、突然関東地方を襲った大地震によって、三浦のこれまでの発展の基礎がくつがえされました。美しい海岸線は隆起して岩肌をさらけだし、海水浴場や漁港施設は大きな損害を受けました。また、民家も全半壊を含めて全家屋の 40%にあたる 1500 戸あまりが被害を受け、死者 61 名を出しました。しかし、正午というのに火災が出なかったことと、大きな津波の被害をまぬがれたことは不幸中の幸いでした。

三浦の人々は、この困難のなかでも震災の復興をめざして力強く立ち上がり、これを機会に海岸の埋め立てや漁港の整備・魚市場の拡張工事に取り組みました。

この時期は、三崎が日本を代表する大漁港として発展するための出発点でもありました。



乗り合い自動車



西野埋め立て

(松崎貞夫氏所有)

震災あれこれ

震災を経験した人の話によると、「三崎港に水がなくなり、干上がって海底が丸見えになった。城ヶ島から三崎まで歩いて渡れただろう」「城山の高台に

避難して何日も野宿した人々は

干上がった磯から、アワビ・サザエ・トコブシを取ってみんなで分け合った」「高抜海岸の磯という磯は露出し、沖ノ島へ歩いて行けそうだった」と言われるほど地形の隆起(およそ 1.4m)が見られ、三浦の海岸の景観は一変しました。

このほか「江ノ島が沈んでなくなった」とか「朝鮮人が暴動を起こす」「朝鮮人が井戸に毒を入れる」などといううわさが流れ、人々は動揺し、竹槍を作って自警団を組織したとされています。

三浦の震災被害状況

	三崎町	南下浦村	初声村	合計
全壊家屋	234 戸	160 戸	138 戸	532 戸
半壊家屋	408 戸	328 戸	285 戸	1021 戸
死者	43 人	8 人	10 人	61 人
傷者	82 人	12 人	38 人	132 人

(1920 年当時、三浦市全地域の戸数人口 3,818 戸、20,780 人)

(編集委員作成)



震災前の水位を示す

(松崎貞夫氏所有)

昭和時代 戦前の三浦

昭和の三浦の発展は、大打撃を受けた関東大震災の復興から始まりました。しかし、復興の目安がたったやさきに、1932(昭和7)年の^{なかざき}仲崎と^{はなぐれ}花暮および1936(昭和11)年の城ヶ島と大火事が相次ぎました。それに追い打ちをかけるように、戦争という多難な時期を過ごさなければなりませんでした。

三崎での震災による漁港の復旧は1928(昭和3)年には終わり、翌年には三崎魚市場が西野の埋立地に新設されるなど漁港整備は少しずつ進められました。

特に「マグロえさ」としてのイワシの豊漁は、他港の漁船を三崎に集める大きな要因となりました。昭和の初めには、全国で1300余隻^{せき}と言われた^{はえなわふね}マグロ延縄船のうち230～240隻が三崎港に集中しました。和歌山・徳島・高知・三重・宮城・岩手・山形などから、大型動力漁船が相次いで三崎に移住してきたのです。彼らは三崎を根拠地にして、東太平洋やマリアナ沖などにまで進出しました。

こうして三崎港は、全国でも指折りの遠洋漁業の基地として、その名をとどろかせるようになりました。



マグロ船の出航

(柳井晋氏所有)



魚市場へのマグロの水揚げ

(松崎貞夫氏所有)

しかし、大型漁船を所有して操業する資本力のない地元漁業者は、相変わらず伊豆大島沖までの範囲での小型動力船で操業^{そうぎょう}しなければなりませんでした。それでも、1937(昭和 12)年には三崎町に住む遠洋漁業者のみによって三崎町地元遠洋漁業者組合が結成(在籍船 34 隻・平均 86 トン)されました。

沿岸漁業では金田湾の定置網漁業^{ていぢあみ}がさかんになり、煮干しやメザシが大量に加工されて京阪神にまでその市場が広がりました。

農業でも、南下浦や初声では京浜地区への市場の拡大にともなったダイコンを中心として野菜類・葉煙草・輸出用ユリの栽培が行われる一方、三浦特産のスイカも 1935 年頃から増えはじめ、近郊農業^{きんこう}としての発展を見せるようになってきました。

好況を続ける魚市場など活発な経済を反映して三崎では、1934(昭和 9)年の近代的な町役場建設をはじめ、1935(昭和 10)年に上水道施設が整備されたり銀行の支店が建てられたりするなど、産業経済の面で大きく発展しました。

戦時下の三浦

1931(昭和 6)年の満州事変から始まった中国との戦争の長期化は、やがて三浦の経済や暮らしにも深刻な影響を及ぼしてきました。戦争が激しくなってきた 1941(昭和 16)年以降に大型優秀漁船^{ちようよう}が次々と海軍に徴用されて、三崎の遠洋漁業はしだいに衰えてきました。

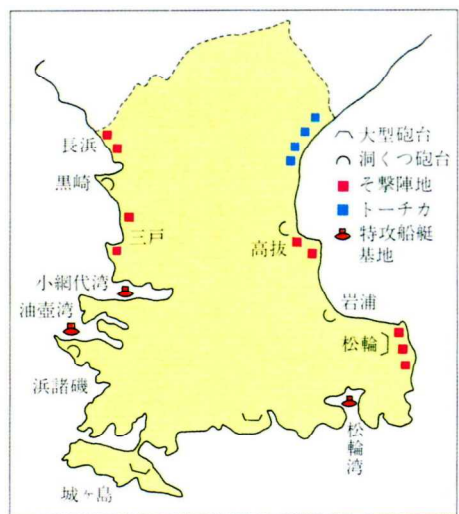
三崎地元遠洋漁業組合加入船は、1941(昭和 16)年に 1 隻・1942 年 11 隻・1943 年 9 隻・1944 年 8 隻と合計 29 隻が徴用されて日本近海の哨戒^{しょうかい}(敵の襲撃の警戒)や南洋群島間の輸送・連絡にあたりましたが、敗戦までにその 7 割の 20 隻が沈没し、乗員のほとんどが戦争の犠牲^{ぎせい}になりました。敗戦のときには組合に属する漁船は、老朽化^{ろうきゅうか}した小型漁船が 12 隻に過ぎませんでした。また沿岸・沖合漁業も、1937(昭和 12)年ごろからは燃料油^{ぎょうちゆう}や漁網^{つな}・網の原料である木綿・麻など生産資材が手に入りにくくなる一

方、若い男性も兵隊にとられて老人に任されるようになりました。さらに戦争が激しくなると漁場が戦場となり、1945(昭和 20)年には新島浦や伊豆大島で操業中の三崎の漁船が多数の戦闘機に銃撃されたり、沿岸の漁船も襲撃されるようになりました。

こうして戦争の終わり頃には、わずかに手漕ぎの船で、空襲警報の合間に沿岸近くで漁をするに過ぎないほどになりました。そのため三崎魚市場の水揚げ量は、戦前の最高 35904 トン(1937 年)に比べてわずか 1770 トンに激減しました。

1941(昭和 16)年の農作物作付け制限規則によってスイカの作付けが禁止され、それに代わって米・麦を主として甘藷・馬鈴薯・豆類の作付けが強制されたため、農業で発展を見せていた園芸栽培農業は衰えていきました。

三浦半島は、首都東京の防衛のための重要な地域であることから東京湾要塞地帯とされ、三崎城ヶ島・劔崎に大きな砲台が設置されてきました。



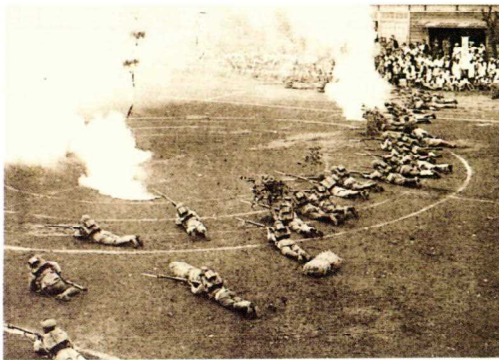
三浦市内の旧軍基地

やがて、アメリカ軍の攻勢によって太平洋戦争の形勢が悪化すると、1945(昭和 20)年にはアメリカ軍の日本本土上陸・本土決戦を想定して、小網代・油壺・松輪の各湾に特殊潜攻艇(海龍と呼ばれる小型の潜水艦。魚雷を積んで敵を攻撃したり、自分で敵艦に体当たりする)や特攻舟艇(震洋と呼ばれるベニヤで作ったモーターボート。前方に爆弾を積んで敵艦に体当たりする)の基地が設けられるようになりました。

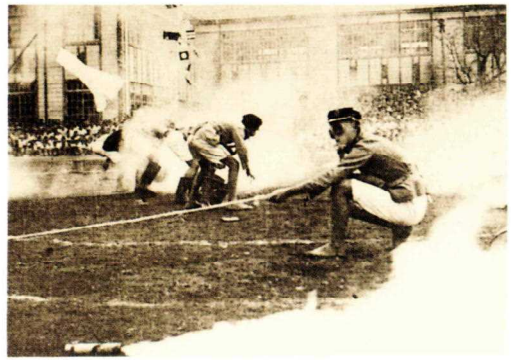
戦争と子どもたち

1941(昭和 16)年にこれまでの小学校が国民学校(初等科 6 年・高等科 2 年)と改められると、小学校でも戦争への協力体制が作られました。儀式や学校行事が重視され、の宮^{きゅうじょう}城^{ようはい}遙^{こうきよ}拝(天皇の住む皇居の方角に向かって最敬礼^{さいけいれい}を行う)から団体行進・^か駆け足訓練・^{ぼくじゅう}木銃をかついでの軍事教練や女子は救護訓練・看護訓練などをさせられました。

三崎小の『八十八年の歩み』によれば、三崎町でも小学校 3 年生以上は少年団が組織され、「銃^{じゅうご}後の守り」と食糧増産にかりだされました。高等科(今の中学 1・2 年生)の男子生徒は防空壕掘りに、女子生徒は火薬の原料になるカジメ(海草)の採取(カジメから取り出したカリ塩が、1940～41 年ごろから爆薬の原料に使われた)と乾燥作業へと動員されました。



戦前の運動会の 1 種目 (模擬戦)



戦前の運動会の 1 種目 (敵機襲来)

(松崎貞夫氏所有)

漁船の出征

1937(昭和 12)年に日中戦争が始まりましたが、その年の 12 月には南京^{なんきん}を攻略して戦線はさらに揚子江^{ようすこう}(長江^{ちょうこう})をさかのぼって広がっていきましました。この広くなった戦場に物資を補給^{ほきゅう}するために、多くの小型発動機漁船^{ちようよう}が徴用されるようになりました。

1938(昭和 13)年には三崎からも徳栄丸^{とくえいまる}(日の出・11 トン・40 馬力)、兵助丸^{ひょうすけまる}(白石・12 トン・40 馬力)、金七丸^{かねしちまる}(海外・13 トン・50 馬力)が船長以下ほとんど乗組員ごと徴用され、広島県宇品の暁部隊^{うじな あかつきぶたい}(陸軍の船舶部隊)に編入されたうえ、乗員は軍属^{ぐんぞく}(軍人以外で戦争に参加すること)の辞令^{じれい}を受けました。そして上海^{しゃんはい}まで独航^{どくこう}して、現地で神奈川・静岡二県徴用漁船団として揚子江(長江)を上下して戦争の物資補給の輸送任務にあたりました。1940(昭和 15)年の秋には徴用は解除されましたが、兵助丸は 1938(昭和 13)年 8 月 21 日に砲撃を受けて沈没しました。

太平洋戦争が始まると、遠洋漁船・大型沿岸漁船とさらなる徴用が行われて戦争に参加させられ、船も人も大方はそのまま消息^{しょうそく}を絶^たててしまいました。そうした中で、1944(昭和 19)年 2 月に、乗員 7 人とともに徴用された三崎の第二兵助丸(33 トン)は、他の 2 隻とともに国の方から戦場で撃沈^{げきちん}されたものと思われて全員戦死^{せんじ}の公報^{こうほう}が発表されましたが、終戦から 6 年目の 1951(昭和 26)年に、南洋マリアナ群島のアナタハン島に流れ着いて自給自足の生活をしていた 20 人がアメリカ軍に救出され、その年の 7 月 6 日にアメリカ軍の飛行機で日本へ生還^{せいかん}するという出来事もありました。

1943(昭和 18)年ごろに戦況はどんどん悪化して金属が不足すると、子どもたちも大人と一緒に11万枚もの硬貨(銅貨・白銅貨・銀貨)を回収したり、文鎮の供出にも協力しました。この頃になると子どもたちのお菓子もなくなり、甘いものといえば甘藷・南瓜・さとうきびの茎などで、それを食べて我慢していました。

戦局のさし迫った1945(昭和 20)年になると、4月から国民学校初等科を除くすべての学校の授業の1年間の停止が決定され、生徒・学生たちの勤労働員の体制が徹底されました。南下浦小学校の校舎も、アメリカ軍上陸に備えて配置された日本軍の兵隊の兵舎として利用されたりしました。相模湾へ連合軍の上陸が噂されると、一般の市民も竹槍でこれを防ぐ本土防衛対策も考えられました。

さらに三崎町では町長や在郷軍人(現役を退職した軍人)・警察署長などが、県の意向を受けて警察の一室でひそかに、この町の老人や女・子どもを長野県へ集団疎開させる計画をねったと言われています。これによると小学校高等科児童(今の中学1・2年生)は町にとどまって郷土防衛隊に加わって在郷軍人や警察官とともに主として弾丸運びにあたり、さらに疎開は長野県まで10日間かけて歩いて行く予定だったということです。

小学生の勤労働員(三崎小学校)

- ①戦車・飛行機の潤滑油とするためのヒマの栽培と採取
- ②洋服の布地とするためのカラムシ(麻の一種)とり
- ③馬のえさの草刈り
- ④三崎小学校区の農家全体の麦畑の麦踏み
- ⑤城山の竹藪の開墾(開いた畑に粟と小麦がまかれ、卒業式の祝い餅とパンになった)

戦後の復興

1945(昭和 20)年 8 月 15 日正午の「ポツダム宣言」の受諾^{じゅたく}を告げる昭和天皇のラジオ放送で、満州事変に始まる 15 年にもおよぶ長い戦争が終わりました。

三浦市では、この戦争で 20 代の若者を中心に約 1000 名もの戦没者^{せんぼつしや}を出し、経済的にも大きな痛手^{いたで}をこうむりました。こうしたなか、アメリカを中心とする連合軍の占領のもとで全国的に農地改革^{かいかく}や民主化政策が進められました。三浦でも 1946(昭和 21)年から行われ農地改革では 266ha 余り(1950 年三浦市農地総面積 1184ha)の農地を地主から国が買い上げて、改めて小作人に安く売り渡されました。また、政治の民主化として地方自治が進められ、これまで町村議会から推薦^{すいせん}されていた町村長を住民が直接選挙することになり、1947(昭和 22)年 4 月、三崎町長に松崎定治・南下浦町長に新倉誠一・初声村長に山田孝三郎がそれぞれ選ばれました。

産業面でも、戦後の食糧難解消のために政府がとった漁船建造奨励^{しょうれい}政策のもとで遠洋漁業用マグロ・カツオ大型漁船も多く作られ、三崎魚市町水揚げ量も遠洋漁業を中心に 1949(昭和 24)年には 32419 トンに達し、目覚ましい復興を見せました。

1953(昭和 28)年末に始まったアメリカの南太平洋海域(ビキニ島周辺)での原水爆実験^{げんすいばく}によって、翌年 3 月に焼津港所属の第五福竜丸が「死の灰」を浴びて被爆^{ひばく}しました。三崎港でも 3 月 26 日に帰港した第十三光栄丸から強い放射能^{ほうしゃのう}が検出され、漁獲物^{ぎょかくぶつ} 48.75 トンすべてが廃棄^{はいき}されました。さらに 4 月から 12 月にかけて帰港した遠洋漁船合計 158 隻からも相次いで放射能が検出され、合計 150 トン(当時の価格で 10 億円)もの漁獲物が廃棄されました。この事件は「原爆マグロ」として社会に大きな衝撃^{しょうげき}を与え、一時期マグロ類の価格^{ぼうらく}は暴落して取り引きはほとんど停止し、三浦の漁業にも深刻な影響を与えました。

こうしたなかで漁業と密接な結びつきのある三崎の人々は、1954(昭和

29)年4月20日に魚市場でアメリカの原爆実験に反対して町民大会を開き、不安と怒りのなかで大会宣言^{せんげん}を決議して「(1)公海自由の確保 (2)治療^{ちりょう}・生活費の完全保障 (3)災害保障の完全実施 (4)原爆の禁止」を訴えました。

農業では戦争中からの作付け統制もしだいに解除されて、スイカ・キャベツ・トマト・レタスなど都市向けの商品作物を主体とする近郊農業が再び中心になってくるようになりました。

また、三浦半島には明治のころより東京湾要塞司令部^{ようさい}が置かれて厳しい監視が続けられていましたが、戦後になると東京や横浜の人々を中心に手近なレクリエーションの場として、城ヶ島や油壺には観光バスが多く来るようになりました。

新制中学校の誕生

学校教育面でも大きな改革が行われ、これまでの国民学校から小学校6年間および中学校3年間の義務教育の新しい体制に変わりました。三浦でも1947(昭和22)年に、三崎・南下浦・初声の3中学校がスタートしました。

開校当初は独立した校舎はなく、旧軍隊の施設を使用したり近くの小学校に間借りするなどしてその場をしのぎました。

校舎も大変不足していたため、午前番・午後番の2回に分ける二部授業で行われました。机や椅子^{いす}はもちろんのこと、教科書やノートも十分にそろわないなかでの授業でした。

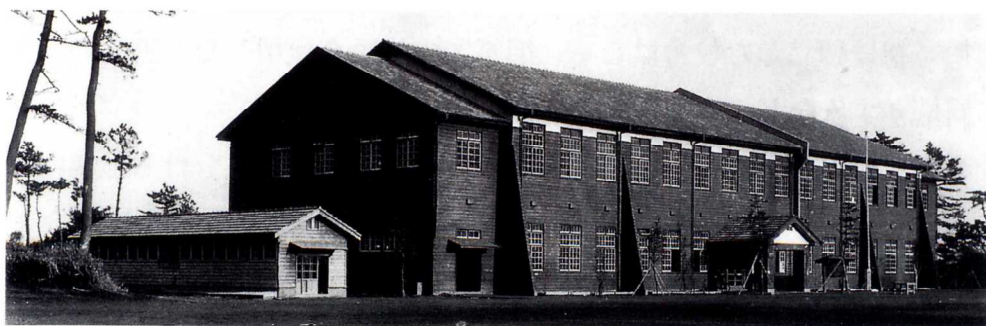
新制中学校は当時週5日制で、農業の忙しい時期には1週間前後の農繁^{のうはん}休業をとる学校もありました。服装は今のよう制服はなく、質素な身なりをしていました。また、高校進学を希望する生徒はさほど多くありませんでした。

開校当初の初声中学校（創立30周年記念誌より）

初声中学校（元横須賀海軍通信隊初声分遣隊^{ぶんけんたい}の兵舎）は、初声村の北端に位置しているため生徒の通学路に問題があった。三戸や下宮田の生徒は4キロ^{あま}余りの道を登校しなくてはならない。しかも生徒の服装^{ふく}といえ、国防服^{こくぼうふく}に戦闘帽^{せんとうぼう}そして下駄履^{げたば}きといういでたちであった。

教室は6学級分あったが、教室とは名ばかりで机や椅子^{いす}などはほとんどなく床に座らせ、ミカン箱が机の代りだった。備品^{びひん}と言え、古びたオルガン1台と磨り減ったガリ版^{かりばん}ぐらいであった。教科書は全くなし。後になって配られはしたものの、3人に1冊とか5人に1冊といったありさま。しかもその教科書は、新聞紙を八つ切りにしたような薄っぺらなパンフレット程度のものでした。学用品も^{きよくど}極度に不足し、ノートはおろか習字用の半紙さえ事欠くほどでした。

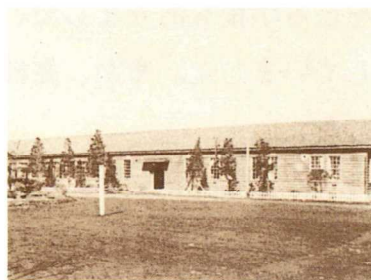
授業の方も、1・2・3期生は毎日何時間も校舎内外の整備作業（トロッコを押したり、埋め立てをしたり）に追い使われて授業も満足にできず……



昔の三崎中学校



昔の南下浦中学校



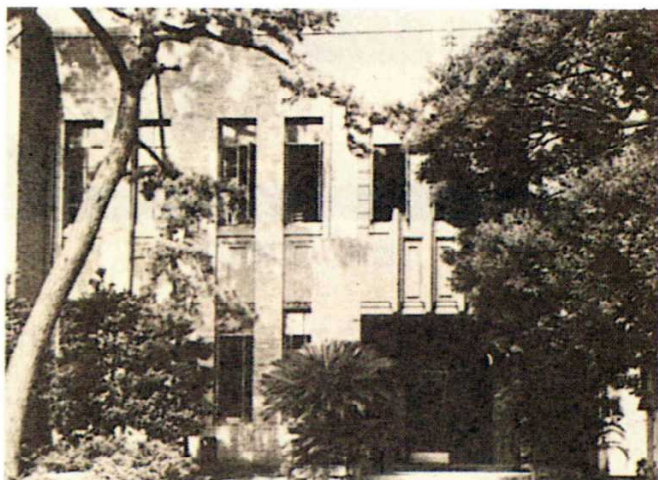
昔の初声中学校

（各中学校所有）

三浦市の誕生

三崎町と南下浦町および初声村は、古くからの結びつきが見られました。3町村はともに三浦半島の南端部にあって、人情・風俗・習慣などで多くの共通点をもっていました。地理上も隣接し、容易に結びつける条件がありました。

1953(昭和 28)年の町村合併促進法^{がっぺいそくしんほう}の施行によって、1955(昭和 30)年1月1日に生産と観光の町の旗印^{はたじろし}とし、半島の開発と住民の福祉増進をめざして2町1村が合併し、三浦市が誕生(合併当時、面積 30.39km²・人口 35166人・戸数 6996戸)しました。



旧三崎町役場

(高梨健児氏所有)



旧南下浦町役場

(松崎貞夫氏所有)

城ヶ島大橋の完成

1955(昭和 30)年 1 月 1 日に誕生した三浦市は、その後、市民の大きな夢であった城ヶ島大橋を 1960(昭和 35)年に完成させました。漁港整備や観光事業を大きく発展させるなか、城ヶ島大橋は新生三浦市のシンボルとなりました。

この大橋の架橋工事は、3年の歳月と7億余円の巨費をかけて完成されました。橋は、海橋部分の長さ 575m・幅員 11m・高さは満潮時で 21m となり、当時東洋一の箱桁橋として多くの注目を集めました。

※箱桁橋…橋下が箱状の橋のこと



完成間近の城ヶ島大橋 (高梨健児氏所有)

三浦の歴史

	三浦の出来事	日本の主な出来事
旧石器時代	水谷戸遺跡、大畑遺跡	
縄文時代	大浦山遺跡、三戸遺跡、諸磯遺跡	
弥生時代	赤坂遺跡、大浦山遺跡、遊ヶ崎遺跡 才京込遺跡	<u>239 邪馬台国が魏に使いを送る</u>
古墳時代	大椿寺裏山古墳	
<u>飛鳥時代</u>		<u>645 大化改新が起こる</u>
奈良時代	『日本書紀』に「三浦」（御浦）の地名が出てくる 神宮寺を行基が開くと伝えられている	710 平城京に都を移す 745 大仏の建立
平安時代		794 平安京に都を移す
	866 海南神社できる <u>天養院の薬師如来像がこの頃つくられる</u>	1051～1062 前九年の役
	1063 平太夫為通に三浦郡が与えられる 平為継も源義家に従う	1083～1087 後三年の役
	1180 衣笠城が落城する	
鎌倉時代		1192 鎌倉幕府ができる 1221 承久の乱
	1213 和田の乱（和田義盛亡びる） 1247 宝治の乱（三浦氏亡びる）	1333 鎌倉幕府が亡びる
	1319～23 新井城できる	1334 建武の新政
室町時代	1335 三浦時継が三浦の地を与えられる	
戦国時代	1494 三浦道寸が新井城の城主となる	1467 応仁の乱
	1516(1518) 三浦道寸が北条早雲に亡ぼされる	
	1590 三浦半島が徳川家康の領地となる 三崎が天領となる	1590 豊臣秀吉が北条氏を滅ぼし、全国を統一する
江戸時代	1678 城ヶ島西山に「灯明台」ができる 1708 「入江新田」の開発が始まる 1811 会津藩が江戸湾警備にあたる 1847 海防陣屋が作られる	1603 江戸幕府が開かれる 1825 外国船打払令 1853 ペリーが浦賀に来る 1867 大政奉還

	三浦の出来事	日本の主な出来事
明治時代	1870 城ヶ島灯台できる	1868 明治維新
	1872 三崎郷学校が日の出町に開校	1872 学制の発布
	1877 横須賀警察署三崎分署が長井から六合の円照寺へうつる	
	1881 東京～三崎間が汽船で結ばれる	
	1886 コレラが流行する	1894 日清戦争
	1889 町村制が施行され、三崎町・南下浦村・初声村できる	1904 日露戦争
大正時代	1901 三崎～浦賀間に乗り合い馬車が開通	1914 第一次世界大戦はじまる
	1913 三崎町に初めて電灯がともる	
	1917 三崎～横須賀間に乗り合い自動車が開通	1923 関東大震災おこる
昭和時代	1921 三崎町営魚市場が海南町に建設される	
	1934 最初の水道がはじまる	1937 日中戦争はじまる
	1941 これ以降、大型優秀漁船が海軍に徴用される	1941 太平洋戦争はじまる
	1945 小網代湾・油壺湾・松輪湾に特殊潜攻艇や特攻舟艇の基地ができる	1945 「ポツダム宣言」を受諾し、終戦
		1946 農地改革がはじまる
	1947 町村長を住民が直接選挙をする 三崎・南下浦・初声の3中学校が創立される	1947 日本国憲法が施行される
		1951 サンフランシスコ講和条約が結ばれる。
	1954 「原爆マグロ」事件が、三浦の漁業に影響を与える 三崎魚市場で、原爆実験に反対する町民大会が開かれる	1953 アメリカ合衆国がビキニ島で原水爆実験を行う
	1955 2町1村が合併し、三浦市が誕生する	
	1960 城ヶ島大橋が完成する	1960 頃 高度経済成長期はじまる
	1966 上原中学校が創立される 京浜急行が三浦海岸まで延長される	
	1973 毘沙門地区にし尿処理として衛生センターが完成する	1972 沖縄が返還される
	1974 長野県須坂市と姉妹都市を結ぶ	1973 オイルショックがおこる
	1975 京浜急行が三崎口まで延長される	1979 日中平和友好条約が結ばれる
	平成時代	1991 毘沙門地域にゴミ処理施設として環境センターが完成する
1991 三浦海業公社が設立される		1991 湾岸戦争がおこる
1992 オーストラリアのウォーナンプールと姉妹都市を結ぶ		1993 ヨーロッパ連合の発足
1997 潮風アリーナが完成する		
2001 うらりが完成する		2008 北京オリンピック開催

	三浦の出来事	日本の主な出来事
平成時代	2009 チャッキラコが無形文化遺産に登録される 2012 海洋教育をはじめ「三浦ツナ之介」がデビューする 2014 三崎中学校・上原中学校が統合し、新三崎中学校が開校「みうらん」がデビューする	2011 東日本大震災 2014 消費税が8%になる 2016 オバマ大統領が広島訪問をする イギリスのEU 脱退表明 リオデジャネイロオリンピックの開催

【三浦市のご当地キャラクター紹介】



みうらん



三浦ツナ之介

プロフィール

- ①約1000本が咲く三浦海岸の「河津桜」の妖精(女の子)
- ②三浦海岸の砂浜と三浦大根が大好き。
- ③河津桜が咲く早春が活動期に見えるが、夏にはアロハシャツを着てビーチを闊歩している。
- ④三浦海岸の魅力を世に広めるため、風に乗って活動している。
- 【住所】 小松ヶ池(河津桜の群生地)
- 【誕生日】 立春(河津桜が芽吹く頃)
- 【性格】 放浪癖がある(特に強風時)
- 【趣味】 風に乗って三浦海岸のイベントに出かけるのが大好き。特に「三浦海岸桜まつり」「三浦海岸納涼まつり花火大会」「どっどいセール」が毎年の楽しみで、友達の三浦ツナ之介くんを誘って出かけています。
- 【好きな食べ物】 三浦市産の水産物・農産物
- 【好きな場所】 三浦海岸の砂浜、小松ヶ池、金田湾の朝市

プロフィール

- ①三浦一族の鎧を着ることで陸に上げられるようになった「まぐる」
*まだ慣れていないので、陸上歩行は時間制限もある
- ②子供好き
- ③疲れると横になって目を開けたまま寝る
- 【住所】 三浦三崎漁港
- 【誕生日】 10月10日(まぐろの日)
- 【性格】 放浪癖がある(特に強風時)
- 【趣味】 三浦市内の祭りやイベントを見に行くこと。特に「三崎港町まつり」「三崎まぐる鉄火巻き大会」「道寸祭り～笠懸(かさがけ)」「みうら夜市」「チャッキラコ」が毎年の楽しみで、友達の松輪サバくんに誘われて海から見えています。
- 【好きな食べ物】 三浦市産の水産物・農産物
- 【好きな場所】 三浦海岸の砂浜、小松ヶ池、金田湾の朝市

【三浦市チャッキラコ】

チャッキラコとは、毎年1月15日の小正月に三浦市三崎の仲崎・花暮地区や海南神社で、豊漁・豊作や商売繁盛などを祈願する女性のみで踊られる民俗芸能の一つです。その起源は江戸時代まで遡り、『三崎志』（宝暦6年（1756）刊行）の年中行事の項に「○初瀬踊 一名日ヤリ 十五日女兒集り踊ル」とあるので約250年前から伝承されてきたことが伺えます。また、踊りには2つの伝説が伝えられています。1つは、海南神社の祭神藤原資盈の奥方盈渡姫が、庶民の娘に教えたというもの。もう1つは、源頼朝が三崎来遊の際、磯取りしていた親子に舞を所望し、母親が唄い、娘が舞ったというものです。古代・中世まで遡るかは不明ですが、少なくとも江戸時代中期までは文献で確認されています。



奉納の様子(文化スポーツ課提供)

チャッキラコは、年配の女性10人程が唄い、5歳程～12歳までの少女20人程が踊ります。少女は赤色の晴れ着、年配の女性は、黒色の着物に羽織姿で、舞扇とチャッキラコ（写真右下、綾竹）を演目に応じて使い分け、楽器類は伴わず、素唄と囃し言葉だけの素朴な唄と踊りです。踊りには、「はついせ」、「チャッキラコ」、「二本踊り」、「よささ節」、「鎌倉節」、「お伊勢参り」の6種類があります。当日、午前10時頃本宮の祠前で踊りを奉納、午前10時30分頃海南神社境内の社殿前で踊りを奉納します。午後からは仲崎竜神様と花暮竜宮様の祠前で踊りを奉納し、旧家や老舗商店等を祝福して回ります。

現在、「ちゃっきらこ保存会」（昭和39年結成）により継承され、三浦の伝統文化として少女達が受け継いでいます。



三崎昭和館



チャッキラコの衣装



無形文化財登録認定書

(編集委員撮影)

(三浦市ホームページ引用)

